

《書 評》

青山由紀著「小学校における古典教育の可能性」
桑原隆編『新しい時代のリテラシー教育』
(2008年3月23日刊 東洋館出版社 A5判 449頁)

小林 和馬

1. はじめに

2008年『小学校学習指導要領(国語編)』⁽¹⁾において「伝統的な言語文化と国語の特質に関する事項」が新設され、古典に親しむ態度の育成が重視されるようになった。さらに、2015年8月に中央教育審議会から出された「論点整理」では、今後、「古典の学習を通じて、日本人として大切にしてきた言語文化を積極的に享受していくこと」などが示された。

2008年『小学校学習指導要領(国語編)』で「生涯にわたって古典に親しむ態度を育成する」となっていたものが、「論点整理」では「伝統や文化に立脚した人間」「古典の学習を通じて」「積極的に」という言葉になり、今後、より一層伝統的な言語文化の育成が重視されていくことが考えられる。

さて、古典教育に関する論考は、現在に至るまでさまざまな研究者によってなされ、古典教育の意義などが語られてきた。本論は、2008年『小学校学習指導要領(国語編)』が出される前に書かれたものであるが、現在「論点整理」でも示されている「具体的な学びの姿」「学びの連続性」「主体的な学び」といった視点を多分に内包している。古典を扱った学習が一層重視されるようになった今、「具体的な学びの姿」「学びの連続性」「主体的な学び」といった視点や国語教育でなぜ古典を扱うのかといったことを本論から考えてみたい。

2. 本論の構成

本論は、桑原隆編『新しい時代のリテラシー教育』の中に収載されており、以下の構成になっている。

第1章 小学校における古典教育の実態と本研究のねらい

第2章 単元「千年の昔の語り部」(5年生)

第3章 単元「童謡・昔話を読もう」(4年生)

第4章 「言語文化に親しませる」ねらいと学習材・指導法

3. 本論の概要

3.1. 古典教育の現状と研究目的

青山氏は、小学校の古典教育について「内容理解を伴わない音読や暗唱に傾斜しすぎている(p.368)」とし、具体的に「易しい文語調」を取り上げ、「言葉の量が少なければ子どもの抵抗や負担が軽く、内容を理解しやすいとは言えない(p.357)」と述べている。そして、本論の目的を「子どもにとって「易しい」文語調の学習材とは、どのようなものか。また、どのような指導法が適しているのか」について、「中、高学年の実践を通して、小学校における古典教育の可能性を探る」ことにあるとしている(p.357)。

3.2. 単元「千年の昔の語り部」の取り組み

第1次 聞いただけでわかるかな? 古典との出会い
～『竹取物語』～

第2次 これでも日本語? 仮名文字のはじまり
～『万葉集』～

第3次 語り部になろう 21世紀の語り部
～『平家物語』～

3.3. 単元「童謡・昔話を読もう」の取り組み

第1次(帯単元) 童謡に親しむ

第2次 何の話かな(江戸期の昔話と出会う)

第3次 昔話を語ろう

3.4. 小学校において古典を扱う意義

青山氏は「小学校において古典を扱う(p.363)」意義として、次の4点を挙げている。

・純粋に声に出して古典を楽しむ素地となる。

- ・現代文よりも声に出す楽しさを味わいやすい。
- ・何度も音読することで自然と日本語のリズムや語感を体得していく。
- ・言語生活の中に連綿と流れている言語文化を体感させる。

4. 「具体的な学びの姿」と「主体的な学び」を考えた単元構想の重要性

「論点整理」では、「資質・能力を育成するために「何を学ぶのか」という、必要な指導内容を検討し、その内容を「どのように学ぶのか」という、子供たちの具体的な学びの姿を考え」て教育課程編成を行う必要性が示されているが、本論では、その児童の実態から具体的な学びの姿を考え、単元構想を行う流れが詳しく書かれており、参考になる。

例えば、「千年の昔の語り部」では、児童の実態を以下のように捉えた上で単元構想を行っている。

- ・文語詩を好んで暗唱する傾向にある。
- ・詩のイメージや内容を聞き手に声の力で伝えることができる。
- ・語ることを楽しむ。
- ・まとまった分量の語りや群読の経験はない。
- ・詩の技法と効果についてほとんどの児童が理解している。
- ・歴史的仮名遣いを読むことに慣れている。
- ・俳句では、作句と句会を行っている。

そして、これらの実態を基にして具体的な学びの姿と指導内容が検討され、「音声だけで古典に出会わせ」ることで「現代の自分たちにも内容がわかるという驚きを持たせ」、「現代でも使われている言葉が多用されていることに気づかせ」ることができるように『竹取物語』の原文や『万葉集』の長歌を読む学習、『平家物語』を群読する活動が組み込まれた(p.358)。この「自分たちにも内容がわかるという驚きを持たせ」という視点は、「論点整理」で示されている「主体的に学習に取り組む態度も含めた学びに向かう力」や「興味を持って積極的に取り組む」ようにするために重要な視点であろう。

これらの学習を行った結果、「既習の知識を生

かして内容を推測することを楽し(p.360)」む姿や「学習経験のない群読という表現活動に興味を持つ子どもが多かった(p.361)」などの姿が見られたという。

また、『平家物語』で群読を行った理由は、「個々に語らせるのは負担感が大きいと判断したため(p.361)」だという。実態を基にして具体的な学びの姿と指導内容を考えなければ、力が高まらないだけでなく、古典に対する苦手意識をもたせることにつながりかねないと考えたとき、それらの視点は、古典の学習において重要だということがわかる。

5. 「学びの連続性」を考えた単元構想

「論点整理」において、「前の学校段階での教育が次の段階で生かされるよう、学びの連続性が確保されることが重要である」とされている。これは、学校段階のつながりだけでなく、学年間、単元間などにおいてもいえることであろう。「論点整理」では、さらに「獲得された知識・技能や育成された資質・能力を自覚」すること、「自らの学習活動を振り返って次につなげる」ことの重要性が示されているが、本論では、小学校中学年及び高学年の児童が、既習事項を用いてどのように古典と向き合い、学んでいったのかが詳細に記されており、この学びの連続性について考えることができる。

青山氏は、「古典学習の導入となる中学年では、まずは文語的な口調や言い回しに慣れさせるところから始めたい(p.363)」とし、4年生「童謡・昔話を读もう」において、俳聖カルタで歴史的仮名遣いに慣れる学習などが行われている。そして、5年生「千年の昔の語り部」では、中学年までに歴史的仮名遣いに慣れていることなどを受け、『竹取物語』の原文に線を引く学習が組み込まれている。さらに単元内での学びのつながりとして4年生「童謡・昔話を读もう」をみると、単元の初めに俳聖カルタを用いた五音七音のリズムや歴史的仮名遣いに慣れる学習及び『鯉のぼり』を用いた文語的な言い回しに親しむ学習が行われている。すると、その後の『夏は来ぬ』を用いた学習で「『鯉のぼり』にあった「竜になりぬべき」の「ぬ」のように、「～でない」という意味ではな

いんじゃない?だから、これも「夏が来ない」という意味ではないと思う(p.366)」という児童の気づきにつながったという。

このように、その時間、その単元のみ学びではなく、学びの連続性を意識した単元構想が、古典を扱った学習において大切であることが青山氏の実践を通してうかがえる。

6. 国語科教育でなぜ古典を扱うのか

「論点整理」では、「各教科等を学ぶ本質的な意義を捉え直していくことが重要である」とされているが、これは、国語科の中で扱われる古典についても同じことが言えるのではないだろうか。

古典指導の意義や古典学習の目標などは、現在までさまざまな研究者によって語られてきた。例えば、増淵恒吉(1981)⁽²⁾は、言葉の練磨や人間性の育成に古典指導の意義があるとし、世羅博昭(1989)⁽³⁾は、イメージ豊かに読み取ることを古典学習の目標としている。渡辺春美(1998)⁽⁴⁾は、興味や関心を持って意欲的に学習に取り組む姿勢を養うことを目標にして学習者による古典の価値の発見を目指した。伊東武雄(2003)⁽⁵⁾は、古典のおもしろさや美しさに触れ、心情を豊かにしたり、思考力を深めたりすることを古典教育に期待している。青山氏は本論において、言語生活の中に連綿と流れている言語文化を体感させることなどを意義だとしている。このように各人の考える古典指導の意義などに立って、さまざまな学習活動が創られてきたのである。

現行の学習指導要領となり、小学校国語科教科書での古典教材採録数は飛躍的に増加し、何をどのように教えたらいのだろうと悩む教員が存在するようになるとともに、古典を扱った指導事例集が多く出版されるようになった。指導事例集には、単元の指導目標や評価規準、授業展開などが成果物ともに詳細に示されており、これにより、何をどのように教えたらいのだろうという教員の悩みは解消され、形の整った古典の授業ができるのかもしれない。しかし、何も考えずに行っているのだとすれば、児童・生徒にとって意義深い学びとはならないだろう。

指導事例集を読むこと自体が問題なのではない。「論点整理」で「こうした事例を示す際には、

それにより指導が固定化されないような工夫が求められる」とされているように、大切なことは、国語教育でなぜ古典を扱うのかについて教員一人一人が問い直すとともにそのような学習が行われている意味を考えること、児童・生徒が主体的に学習に取り組むことで力を高めていくためには何をどのように行えばよいかを考えること、そしてそれらを合わせて学習を創っていくことが大切なのではないだろうか。それは、「論点整理」で示されている「カリキュラム・マネジメント」の視点と通じるものであるだろう。今後、より一層伝統的な言語文化の育成が重視されるようになる今だからこそ、これらを考えることには、大きな意味があるのではないだろうか。

【注】

- (1) 文部科学省『小学校学習指導要領(国語編)』東洋館出版社、2008年8月
- (2) 増淵恒吉『増淵恒吉国語教育論集 上巻 古典教育論』有精堂出版株式会社、1981年
- (3) 世羅博昭『『源氏物語』学習指導の探究』溪水社、1989年
- (4) 渡辺春美『国語科授業活性化の探究Ⅱ——古典(古文)教材を中心に——』溪水社、1998年
- (5) 伊東武雄『高校古典教育の論究』溪水社、2003年

(横浜国立大学大学院 教育学研究科)